

地区安全特集：日米と中国の非接触戦争の時代到来か

漢和防務評論 20170404(抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

中国が南シナ海で米軍の潜水器を海中から引き揚げたことは、中国が対米非接触戦争を開始したことを意味する、と漢和は指摘しています。
米国は報復として南シナ海のパトロールを強化するであろう。今後米中間で、直接戦火を交えない非接触戦争が発生するであろう、と。
一例として、相手の設置した固定ソナーの破壊、無人機の撃墜、無人機の航法に必要な GPS の妨害、米国艦船に接近しすぎた中国潜水艦の撃沈、宮古海峡を通過して台湾本島東岸に接近した中国機の撃墜などが考えられる、としています。

KDR 編集部香港特集記事：

中国海軍が公海上で米軍潜水器を海中から引き上げた行為は、米中間の非接触戦争を引き起こす可能性が極めて高い。KDR の予測が正しければ、米国は、時機を選んで必ず報復する。2017 年、台湾海峡情勢が悪化するに従って、中国は、東シナ海宮古海峡、台湾本島東岸及び南シナ海で同時に日米と衝突する局面に遭遇する。過去十数年来、中国は、この種の状況が発生するのを避けてきた。したがって全注意力を台湾海峡危機、或いは南シナ海危機に集中してきた。

中国は、南シナ海で米軍潜水器を海中から引き上げた意図を米国に説明している：南シナ海は中国の内海であり、米軍に手出しはさせない、と。しかしトランプ政権は、米海軍の主戦力を西太平洋に移動する既定の政策を放棄していない。2017 年は、米軍の南シナ海パトロールが増加するのは必定である。これは米中の非接触戦争を引き起こす可能性がある。

もし中国海軍、空軍が引き続き宮古海峡を通過し、台湾東岸に接近するようであれば、日中間の非接触戦争発生も排除できない。

東シナ海、南シナ海の敵対状況は、外部世界が想像するよりも複雑である。台湾海軍の消息筋は KDR に対し、次のように述べた：我々は、中国海軍がすでにバリンタン海峡海底に固定ソナーを設置した情報を得ている。もしこの情報が確かならば、中国海軍の次の目標は、南シナ海及び東シナ海の日米海軍艦船の通航経路に類似のソナー探知機器を設置することである。

このほか台湾メディアは、米軍のグローバルホーク無人機がかつて中国の H-6K 戦略爆撃機を追跡したと述べた。KDR は、これは完全に可能であると考えている。中国軍内の資料によると、1996 年、1999 年、台湾海峡及び華南地区で何度も大面積の”不明空情”(註：電波妨害か?) が出現している。KDR は、中米間の非接触戦争がすでに始まった可能性がある判断している。米軍がステルス型作戦機を何度も中国領空に侵入させた可能性は排除できない。そのほか、無人機を生産する中国の会社を KDR が取材した際に、同社は、我々の某型製品は

すでに尖閣群島に侵入した、と述べた。KDR は、この件について東京の防衛関係者に質問したところ、多くの人が初耳だと答えた。

周知のとおり、数年前、“漢” 級核潜水艦が日本の鹿児島海域に侵入した事件が発生した。この潜水艦は終始海上自衛隊に追跡されていたが、当時は撃沈しなかった。これに対して日本の多くの防衛関係者は、次のように述べた：

一事件が、もし今発生したならば、安倍内閣は必ず撃沈する。

一もし核潜水艦でなければ、放射能汚染の可能性がないので、当初から撃沈する可能性がある。

一今日では撃沈した後、公表せずに処理することができる。(KDR:法律上は難しい)

このことから、もし再び中国潜水艦が米海軍空母戦闘群に異常接近し（過去に発生した）、再度日本領海に侵入してきたならば、今回のような緩い対応措置は各方面に言わせれば、あり得ないという。

米軍潜水器を海中から引き上げた行為は、“直接的な非接触戦争行為” の開始に等しい。

A、もし 2017 年に再度類似の事件が発生した場合、米海軍水上戦闘群は即刻警告し、中国艦艇に接近し撤退を要求する。或いは海上で不測事態が発生し、発砲事件となる。米海軍は中国艦船の軍事的行為を無力化する可能性がある。

米海軍のその他の報復行為としては、

B、米国、日本、台湾の海軍は中国海軍が公海海域に設置した固定ソナーを含む水中探知システムを破壊する。この種の状況が発生した場合、多くは外部世界に知らされず、誰がやったかわからない方法を取る。

C、中国あるいは米国が、公海上で、敵対する無人機を撃墜する。これは、この種無人機が相手国の水上艦や島嶼に特に接近しすぎた場合である。

もし再び、中国の無人機が東シナ海の係争海域に侵入した場合、日本は撃墜するかもしれない。この種の衝突の特色は、そのうちの一方が使用するのは無人の機器であることだ。したがってこの行為は依然として“非接触戦争” の範疇のままである。

さらに発生する可能性のある事態は次のとおりである：中国、米国、日本、台湾が中国無人機の航法システムを妨害する。無人機の GPS 信号を妨害し、敵の無人機を直接誘導し、味方の飛行場に着陸させる。逆もまた然りである。当時イランが米国無人機を誘拐したのに似ている。台湾中国科学院は、無人機を捕虜にする技術を開発した。

D. 米軍及び日本軍は、中国海軍が公海上を航行させる無人の機器を拉致する可能性がある。中国はすでに多くの無人偵察船を開発している。

米軍も、無人潜水器に定時爆発装置を取り付け、中国の引き上げを誘う可能性がある。その結果、人員の死傷事故が発生する。

E. 事態がエスカレートすると、中国と日米は、水面下の衝突を招く可能性がある。最も出現する可能性がある事態は：中国潜水艦が再度日本領海に侵入、あるいは、台湾東岸の台湾領海内に侵入、不明物体として撃沈される。誰がやったのかわからない。B-2 戦略爆撃機が中国の駐ユーゴ大使館を攻撃したあと、一種の新たな作戦モデルが誕生した。誤爆！である。しかしこれは本当に誤爆な

のか？あるいは精確な誤爆だったのか？

日本の海上保安庁は”不審船”を攻撃した。実際は、軍事的に見れば、日本は最初から北朝鮮の船であるのを知っていたと **KDR** は思う。

日本領海に侵入した中国潜水艦を撃沈し、”不審な水中船を誤爆”したと宣言したら結果はどうなるか？潜水艦の漂流物は日本領海に出現する。これは”自衛隊法”に符合する。

米軍は公海上で、米軍核潜水艦に近づき過ぎた中国潜水艦を直接攻撃する。だれが攻撃したのか？中国は軍事専門家にテレビ上で推測させる。1999年、彼らは、どの航空機が中国大使館を攻撃したのか推測した。この地域では、中国が推測できる国は、日本、米国、台湾である。韓国、北朝鮮、ベトナムも決して友好国ではない。

F. このほか、ステルス戦闘機の時代、**F-22** 戦闘機が日本領空、宮古海峡の **H-6K** 及び **SU-30** を撃墜することは完全に可能だ。誰がやったか？中国のレーダーからは見えない。

数機の **SU-30** 及び博物館級の **H-6K** 爆撃機が再び台湾東岸に接近した場合、政治的に脅威を感じれば、これらを撃墜することは容易である。ソ連も **TU-16K** を巡航ミサイル搭載機として開発した。現在は **MONINO** 空軍博物館に展示している。**H-6K** と **TU-16K** の開発思想は相当類似している。

ステルス化、デジタル化の時代にステルス化戦争が始まった。現在、大国間で、空中或いは海上において、ステルス或いは非接触方式による衝突が瞬時に発生する危険性が大幅に増加している。

以上